

## <その他>

### ちょっといい話

● 土 屋 博 映

最近僕が注目している研究対象は、という、そんな言い方はおかしく感じられるかもしれない。研究対象って一定しているものでしょ、というのが大方の言い分であろう。ところが、僕は昔から変わっていて、広く浅く何でもやりたい性格。「三つ子の魂百まで」とか「一事が万事」ということわざがあるように、小さい子を見ればその子の将来がわかる、一つの行動をみればその人の全部が分かる、ものである。人間はみなそうだろうと確信しているが、とくに僕は小さい頃の性格が還暦を越えた今も何も変わっていない。また、一々やることが、すべて僕の性格に集約している。

学部、大学院では『枕草子』を手がけたのだが、その後は、『徒然草』『方丈記』『奥の細道』から『源氏物語』、さらに『五輪書』から『般若心経』まで、何でも関わってみた。広く浅く、焦点が定まらないから、一向に業績としてまとまらない。まあこれも運命とあきらめかけていたら、それが、最近『徒然草』に焦点が定まってきた。その原因はよくはわからないのだが、還暦をむかえ、『徒然草』のよさがわかってきた、ということのようだ。『徒然草』のよさ、とは何だ、と言われると困るのだが、どうも『徒然草』と波長があってきたということみたいである。

そこで、冒頭の発言「最近僕が注目している研究対象は」となった次第である。その『徒然草』は何を目的として書かれたのか、彼の著作真意は何なのかという疑問は、非常に難問でもある。というのは『方丈記』などと異なり、彼は作品中で自分という人間についてほとんど語ることがないので、彼がどんな性格でどんな生活をしていたのか、客観的な把握が困難だからである。いろんな学者がいろんな発言・論評をする。しかし、一定の結論は出るにいたっていない。突き詰めてみれば、本人の兼好法師自身が、どういう姿勢で取り組んでいるのか、意識していないかのようでもある。冒頭の、「つれづれなるままに、日暮し、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」の有名な序段も謎の多き一文であるといえる。

したがって、彼の著作意識につき、もろもろの意見が出てくるのもやむをえないことなのかもしれない。要するに『徒然草』という作品はいろんな切り口ができるというわけである。そこで、僕が、波長があったと感じたのは、今の僕の人生の切り口と、彼の人生の切り口に類似点を感じ取った、つまり、心の奥で仲間意識をかぎとったつもりになったからではないか、と、不遜にも、推定してみたわけである。彼は世の中のいろんなことに興味があるわけで、そういう点からいうと、セクト主義ではない。ここからここまでは私の領域ね、そこから向こうはあんたね、お互いの領域には口出ししないようにしようね、などという狭い考えは持っていない。もちろん、「浅い」ところまで僕と似ているとは言わないが、彼が、世の中を「広く」という、大げさにいえば、自分の存在を宇宙的にとらえているということは確かであると思う。

8千万歩の男、伊能忠敬は言うまでもなく、「荒海や佐渡によこたふ天の川」とよんだ400万歩の男、芭蕉など、人生を見つめることを乗り越えて、宇宙をみつめていたと思う。それこそが本

当の科学者、文学者という学者であって、本当の偉人というものであろう。

兼好も同様に、世の中の出来事を、広く、みつめ、とらえ続けてきたと思う。『徒然草』は「教訓書」だという評価が高い。一面あたっているのだが、それがあたるとは思えない

章段も実に多い。説話的なもの、有職故実的なもの、単なる覚書的なもの、などと実にカラフルにいろんな話が次から次へとテンポのよいリズムで語り続けられている。

そこで僕は考えたのだ。彼は「ちょっといい話」をまとめておきたかったのではないかと。彼にとっては恐らく命をかけてという姿勢ではなく、心に残るいい話、いい考え、それをまとめて手元におきたかったのであろう。いい話もほうっておけば忘れ去ってしまう。心にすべてとどめておけるわけではない。さらに安直に大胆に言ってしまうと、『徒然草』は兼好の、「ちょっといい話」と感じたものの収集箱であると。彼はマニアックな「ちょっといい話」の収集家だったのである。そんな切り口が一つくらいあってもいいではないか。

僕も多読で（恐らく兼好も多読だったろう）、古典から現代にいたるまで、またラジオ、テレビ、映画、芸術、スポーツ、それから漫画に至るまで、僕の周囲のあらゆることに興味がある、つまり「好奇心」、それは、兼好同様に旺盛である。だから仲間意識を持つのだ。

ところで、僕の生活（「性格」と重なると思うのだが）は、毎日午前2時から始まる。起きると洗顔し、敬虔な気持ちで仏壇に祈る。次に敬虔な気持ちで碁盤に向かい、名局を一局選び、100手まで並べる、一昨年ある理由から、といっても、単に娘婿が高校囲碁東京都チャンピオンだったからだが（負けたくない）、30数年ぶりに囲碁を再開した。結果、学生時代5段格（免状4段）だったのが、今は努力のかいあって正式の日本棋院6段になった。その上、今はなんと7段を目指すまでになった。

さて、次には敬虔な気持ちで『徒然草』の分厚い研究書を見開き2ページ読む。碁盤にも『徒然草』にも深々と礼をして、まとめる。

それがすむと濫読（乱読）である。ここからは敬虔な気持ちはない。

『徒然草』（影印本・おうふう）、『徒然草』（岩波文庫）『卜部兼好』（吉川弘文館）『徒然草を読む』（岩波新書）『老子・荘子』（講談社学術文庫）『ポケット般若心経』（中経文庫）『歎異抄』（岩波文庫）『枕草子』（岩波文庫）『方丈記』（角川文庫）『おくのほそ道』（岩波文庫）『遠野物語』（角川ソフィア文庫）『梁塵秘抄』（角川ソフィア文庫）『武士道』（知的生き方文庫）『清貧の思想』（草思社）『最大の争い・国境線』（時評社・山本貞雄著）『ソクラテスの弁明』（岩波文庫）『オー・ヘンリー傑作選』（岩波文庫）『モーパッサン短編選』（岩波文庫）『ぶらり旅の中国語単語』（国際語学社）『まんがハングル入門』（知恵の文庫）『日本語はおもしろい』（岩波新書）『新約聖書』（国際ギデオン協会）『風土記』（青春出版社）『日本史と世界史が面白いほどわかる！』（青春出版社）『旅のミニマム中国語』（NHK出版）『北京駐在日記』（東方書店）『中国語会話301』（語文研究社）『中国語がスラスラ話せる本』（永岡書店）、以上26冊、1月7日現在毎朝2ページずつ読み続けている。昨日までは『共産党宣言』（岩波文庫）もその中に入っていた。

昨日から読み始めた『清貧の思想』（草思社・中野孝次）にも早速名言を見つけた。ワーズワースの引用だが「低く暮し、高く思う」という言葉、とても素敵である。読書の喜びの一つに、名言と出会うことがあげられる。こういった時、兼好と同じ気持ちになれたように思えるのである。兼好なら、これを「ちょっといい言葉」として自分の作品の第一段に記したことだろう。

そしてしめくくりが、NHK ラジオ朝鮮語抜粋とNHK テレビ中国語講座抜粋をじっくり読み、続いてNHK ラジオ講座中国語（漢語）テキストCD版（4月～9月分）抜粋の速読、さらに、同じくCD版（10月～3月分）抜粋の速読である。

これを毎日続けていると、兼好同様「ものぐるほし」くなるのだが、逆に生きがいにもなっている。これを名づけて「国囲漢（こくいかん）」と呼んでいる。「国技館」をかけてしゃれてみたが現代の若者には通じそうもない。

その後父の介護の準備が始まるが、万歩計とダイエットにもはまっている。父を施設にあずけながら、年末から年始にかけて8日連続2万歩、7日間16万歩も達成した。昔マラソンでサブスリー（2時間54分）を出したこともあり、体力には自信がある。ダイエットは60キロ前後を正月でも保ち続けるのも自慢である。

そんな僕が、耳にした、経験した「ちょっといい話」を『徒然草』や『遠野物語』にならって覚書風に記してみたらどうかというのが、本稿の狙いである。

ここで、一つおことわり。話の原典が何かはよくおぼえていない上に、僕風にアレンジしてしまっていることだ。おそらく『徒然草』も兼好流にアレンジしているはずだが。論文ではなくエッセイなので、原典はあえて留意しないことにしておく。

次に思いつくままに仮題を目次風にあげておく。中にはご存知の題目もあるだろうが、もちろん内容は原作(原典)に忠実ではない。また本稿では、予定の紙数までいったら、そこで終わり。記しきれなかった分は題目から内容を想像していただきたい。かなり無理な相談だが。

#### ★「ちょっといい話」目次

1 三十振袖 2 教会のパン 3 大根になりたい 4 沈黙 5 11番目の男 6 草原の輝き 12 神様のカルテ 13 水車のある教会 14 本居宣長の恋 15 伊能忠敬の執念 16 大槻文彦の価値観 17 芭蕉の最期 18 新年は恋人と 19 星野富弘さんの人生 20 兄弟3人弁護士 21 天才山田かまち 22 親友の就職 23 青年の挫折 24 甘楽郡は「から」郡 25 貝のプレゼント 26 沢庵のもてなし 27 昼下がりの情事 28 渡哲也の潔さ 29 婚約者の過去 30 恩師は心の恋人 31 元同僚の最期 32 娘と結婚 33 友人の再婚と死 34 相田みつをの名言 35 恋人は大嫌いな男だった 36 ママの忠告 37 荒川静と甲骨文字 38 夫の反乱 39 ある若者の受験時代 40 寅さん（浅丘ルリ子編） 41 寅さん（宮本信子編） 42 クロードの父 43 うさぎと恐竜 44 犯人は親友 45 リリーフエースの死 46 幼稚園のおやつ

#### ★「ちょっといい話」本編

##### 1、三十振袖（山本周五郎原作・土屋改編）

女には病気の母がいた。三十にもなるのに結婚はおろか、母の薬を買う金もない。そこへ近くに住む世話焼きばあさんがやってきた。

「いい話があるんだよ。四十すぎの大工さんなんだけれど、腕が良くてね、金もあるんだよ。あんたの話をしたら、是非妾にほしいって。家も借りてくれるし、生活費もちろん、おっかさんの薬代も出してくれるっていうんだよ。」

女は躊躇した。少し考えさせてほしいという、世話焼きばあさんは、こんないい話はないよ、妾だっていい旦那さんなら、本妻も同じだよと、しつこく繰り返し言いながらかえっていった。

母は、私のことなどかまわないでいい、と言ったが、このままでは母も私も生きてはいけない。考えた末に女は、その話を了承した。世話焼きばあさんはたいそう喜んで大工さんである旦那さんに知らせに行った。

しばらくして、使いの者がやってきて、女と母を新居に引越しさせた。今までの古く、狭い家とは大違いだ。母は申しわけながったが、新居と薬のおかげで元気を取り戻してきた。女は、自

分が我慢すれば二人が生き延びられることを考えると、ちょっぴり幸せな気分にもなれた。

そして新居に落ち着いたところに旦那さんがやってきた。女は緊張してむかえた。

「やあ、どうだい、新居に慣れたかい。おっかさん、体の具合はどうだい。そうか元気になってきたかい、そいつはよかった。」

そう言うと旦那さんは酒とつまみを女に渡した。

「酒をつけてくん。それとつまみを適当に並べて出しておくれ。」

旦那さんは色黒で小柄だったが、そう悪い人には見えなかった。女はお酒の酌をしながら、これから先のことを考えると緊張感がさらにつのった。しかし、旦那さんは意外にも、お銚子を何本かあけると、帰るといった。

「あー、うまい酒だった。おっかさんを大事にするんだよ。何かあったらいつでも知らせに來な。おっかさん養生しなよ。」

それから何回か旦那さんは訪れたが、一向に泊まる気配はない。次に来る予定の日、女が旦那さんのことを考えていると、母が言った。

「おまえ、あの旦那さんのこと、どう思っているんだい。」

「え、どうって。」

「そりゃおまえには妾で可愛そうだけれど、旦那さんは悪い人じゃない。私たちを大切にしてくれる。命の恩人だよ。おまえ、嫌でなければ、今日はおまえから泊まるように旦那さんに言うてはもらえないだろうか。」

「おっかさん、あたしも今そう思っていたんです。このままでは旦那さんに悪くって。」

そして、旦那さんがやってきた。旦那さんはいつものように上機嫌でお酒を飲み、いつものように帰り支度を始めた。女は言った。

「旦那さん、いつもありがとうございます。母も私も旦那さんは命の恩人と思っております。今夜は、もしも旦那さんの都合がよければ、この家に泊まってはもらえませんか。それとも私がお嫌いですか。」

それを聞くと、旦那さんの表情が変わった。「ちょっと待ってくれ」と言ってとび出し、しばらくして着物を持って戻ってきた。

「これは振袖だよ。俺は田舎者で、江戸に出てきて、大工の腕がちったあよかったもので、多少の金はためたんだが、江戸の人間は信用できなくてな。とくに俺みたいな風采のあがない男にほれるような女はみんな金目当てじゃないかと疑うようになってな、実は俺は四十過ぎてるのに、まだ独身なんだ。」

「じゃ、妾って言ったのは。」

意外な事実に驚く女に旦那さんは言った。

「ああ、妾でもいいっていう人なら俺は夫婦になれるかなあ、と思ってな。騙して悪かったけどよ。この振袖は、夫婦になってくれる人にやろうと思って用意しておいたんだ。気に入らなかつたら、受け取らなくてもいいけどな。」

そういうと旦那さんは振袖を女に渡し、降り始めた雪の中を帰って行った。

振袖をかかえ、呆然と立ち尽くす女に、母が言った。

「何やってんだい、おまえ、旦那さんを追いかけて行きなさいよ。早く。」

我にかえった女は振袖に手を通し、雪の中、旦那さんを追いかけた。春の雪は静かに、そして暖かく旦那さんと女に降りかかっていた。

## 2、教会のパン

ヨーロッパの田舎に小さな教会のある小さな村があった。その教会では貧しい村の子供たちに、日曜の礼拝後、パンを配るのが慣わしだった。配っていた牧師さんが、あることに気がついた。最後にパンを受け取るのはいつも決まった女の子だった。注意して見ていると、別に教会に遅れて来ているわけでもなく、自分から意図的にそうしているようだった。ある日、何気ないふりをして、その女の子に訪ねてみた。

「あなたはいつもみんなの最後にパンを受け取るけれど、何か理由があるの？」

女の子は一瞬げんな表情になったが、牧師さんの笑顔を見て安心したように応えた。

「あのね、一番、最後になると、一番小さいパンが残るでしょ。それに、もしかしてたりなくなるかもしれないでしょ。そしたらその最後の人がかわいそうでしょ。だから。」

「うん、そうだね。でもそれだとあなたがかわいそうじゃない？」

「ううん、おかあさんが、そうしなさいって言うし、あたしもそう思うし、自分のことは平気だけど、他の友達がそうなったらかわいそうなもの。」

「そう、わかった、とてもいい考えだね。おかあさんとあなたに神様からの祝福がありますように。」

「ありがとうございます。牧師様。おかあさんにも伝えます。」

そう言って最後のパンを受け取り、うれしそうに去って行く女の子を見送る牧師さんは女の子以上に笑顔だった。

次の日曜、最後のパンは他のパンより一段と小さなパンだった。女の子は前よりもいっそう笑顔を見せて、とびきり小さいパンを牧師さんからもらって、特別にうれしそうに去って行った。

小一時間後、女の子は、牧師さんのところに息せき切って戻ってきた。

「た、大変です、さっきいただいた、パンが、パンが・・・」

牧師さんは笑顔で答えた。

「パンがどうしたの？」

女の子は抱えていた紙袋の中から丁寧に包まれた食べかけのパンを取り出して牧師さんに見せた。

「牧師様、ほら、パンの中から、こんな美しい宝石が出て来たんです。」

牧師さんはそれを見て、笑顔を少しもかえることなく、さらにいっそうの笑顔で答えた。

「ああ、それはねえ、あなたとお母さんが、とてもやさしい心を持っているので、神様のご褒美としてくださったのだよ。私が、お母さんにメモを添えてあげよう。はい、これを持って戻りなさい。これは神様と私とあなたとおかあさんだけの秘密の話にしておこうね。」

女の子は首をかしげながら、しかし、少し落ち着きをとりもどし、笑顔を浮かべ、うなずきながら、紙袋に包みなおして入れた「宝石入りのパン」を胸にしっかりと抱えて、帰っていった。

牧師さんは、少女の後姿を見送っていた。彼の今までの人生の中で恐らく一番の笑顔で。

## 3、大根になりたい

江戸時代、貧しい大根売りの男がいた。大根売りはふとしたことで見かけた吉原の遊女「かえで」に一目ぼれする。しかし「かえで」は人気のある遊女で会うだけでも大金かかる。彼は死めぬ気で大根を売って、長い日にちをかけてやっと一晩「かえで」と時をともにする金を手にすることができた。

男は自分としては一生手にすることなどなかったはずの大金を持ち、遊郭に行った。「かえで」

と一晚過ごすために儉約に儉約を重ね、寸暇を惜しんで仕事をしてためた金だった。そんな大金でも男にとっては、「かえで」との一夜とひきかえなら、惜しくもなんともなかった。

男は「かえで」と二人きりになれた。男は笑顔で酒を飲み、つまみを食べた。「かえで」のお酌をもったいながりながら、杯を重ねた。

夜更けになり、「かえで」が床に入り、言った。

「おいでよ。どうしたのさ。」

男は笑顔で答えた。

「ありがとうございます。でもあたしは、ここで酒を飲みながらあなたの側にいらればそれで十分なんで。」

男は本当にうれしそうに答えた。

「変な人だねえ。あたしゃ、眠くなったから寝るよ。」

「へい、そうしてください。あたしは、あなたの側で一晩いられるだけで幸せなんでさ。」

女は眠りについた。目が覚めると朝だった。男の姿はなかった。置手紙があった。

「かえでさん。ありがとうございました。昨夜のことは一生の思い出となります。今日からまた大根売りに精を出します。本当に一晚側にいられて幸せでございました。ありがとうございました。」

『変な男だねえ。今まで見たこともない男だよ。本当に。』「かえで」は再び眠りにおちた。

「かえで」は年季があけ、はれて遊郭を出られることとなった。しかし、遊びに来た男の誰も待っているわけではなく、故郷に身よりもない自分だった。行くあてもない自分に、その時、突然、あの、大根売りの、男のことが浮んできた。もしかしてあの男との一夜が自分の人生でもっとも幸せな一夜だったのかもしれない。それが今頃わかるなんて。「かえで」は無性に大根売りの男に会いたくなった。

あの一夜で交わした言葉の中から、商売をしているのは、およそ根岸あたりではないかと思当をつけ、近くに宿をとり、男の居場所を、訪ね、捜し歩いた。すると、数日立って、偶然、神社の近くで大根を売っている男を見つけることができた。

「大根いかがですか。おいしい新鮮な大根だよ。」

「かえで」はしばらく威勢のいい男の掛け声を物陰から見つめていた。あの夜の酒を飲む笑顔の男がそのままそこにあった。「かえで」は何かしら胸が熱くなってきた。客が途絶えるのを待って、男に近寄った。

男は愛想のいい元気のいい声でお客である「かえで」をむかえた。

「へい、いらっしゃい。いきのいい大根だよ。」

「かえで」は言った。

「あの、あの、あたし、あたし、あなたの、その、大根になりたいんです。」

男は、一瞬きよんとした。しかし、それが「かえで」だと気がつくのは時間の問題だった。

#### 4、沈黙（村上春樹原作・土屋改編）

とここまで記してきて予定枚数がつきてしまった。いい話を短くまとめるのは意外に大変なものだとわかった。この原稿をまとめているうちに、兼好は創作力的な人間ではなく、改作力的な性格だったのではないかと、またそういう切り口で文学に関わることも可能ではないか、ということが強く感じられた。